



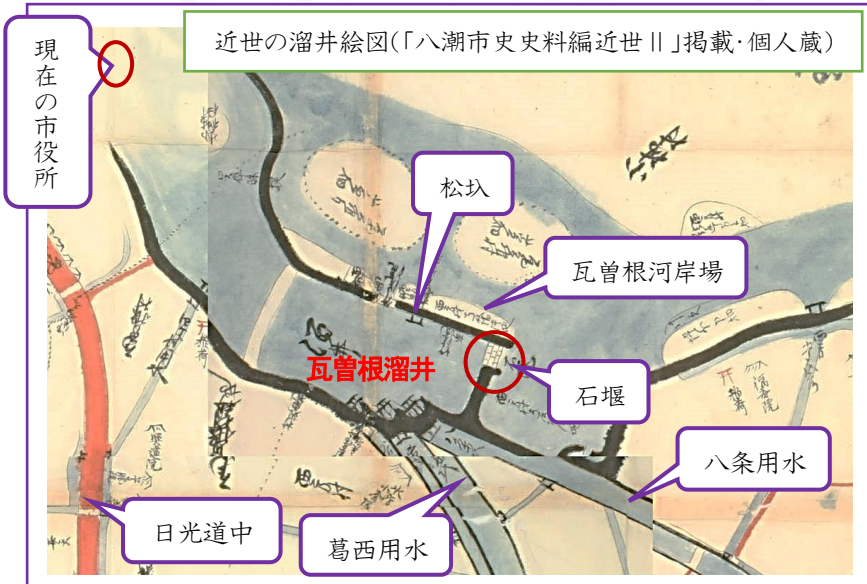
古来、川の恩恵と災害を受けてきた越谷。市域には、東に大落古利根川・中川、西に綾瀬川、そして中央部に元荒川が流れています。その中の**瓦曾根溜井**と**河岸場**を新旧の絵図や写真でご紹介します。

経済と文化の要



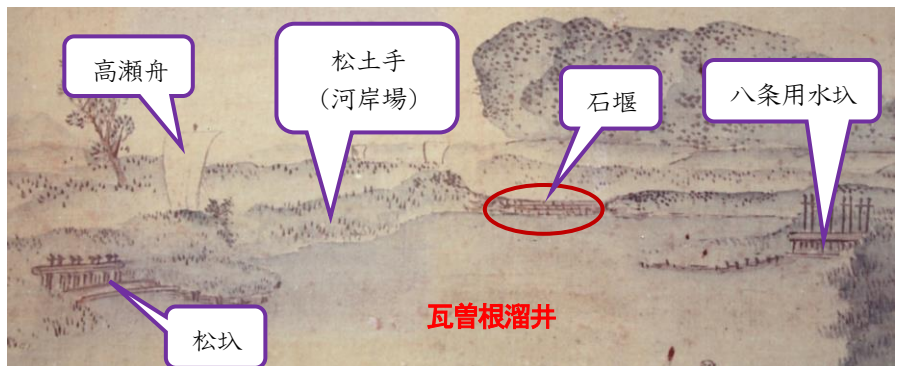
(溜井右岸からしらこぼと橋方面を臨む)

今も市民の憩いの場になっている市役所からしらこぼと橋に至る元荒川右岸の土手道は、古奥州道でした。この辺りは近世になると目覚ましい発展を遂げますが、その立地条件の一つが元荒川でした。まず、今のしらこぼと橋の辺りに堰を設けました。市の指定文化財「西方村旧記 巻」によれば、それは慶長年間(16世紀末~17世紀初め)だったようです。溜井は堰き止められた水が溜められた場所のことです。この水は農業用として近隣90カ村の組合で管理運営され、それらの田畑を潤しました。



石堰と洗い堰

前掲「西方村旧記」には寛文4年(1664年)に、この溜井の堰を石堰にしたとあります。近年までこの跡が残っていました。同史料や「末田村石堰絵図面」を参考にすると、この石堰の上には竹の束や土俵が積み重ねられていたようです。これを「洗い堰」とか「竹流し堰」などと言いました。大水で堤防が決壊しそうになると、まずは石堰より少し上手の松坂という木堰を開いて放流しました。それでも決壊の恐れがある際には石堰上の「洗い堰」が流されて、水面を石堰の高さにまで下げたのです。



(明治34年 大相模地内溜井之図(一部) 秋山千畝画 葛西用水路土地改良区事務所所蔵)



(昭和50年頃)



(平成29年)

溜井の石堰があった所(しらこぼと橋付近)
(同じ場所で撮った写真です。土手に葛西用水などの取水口が見えます。)

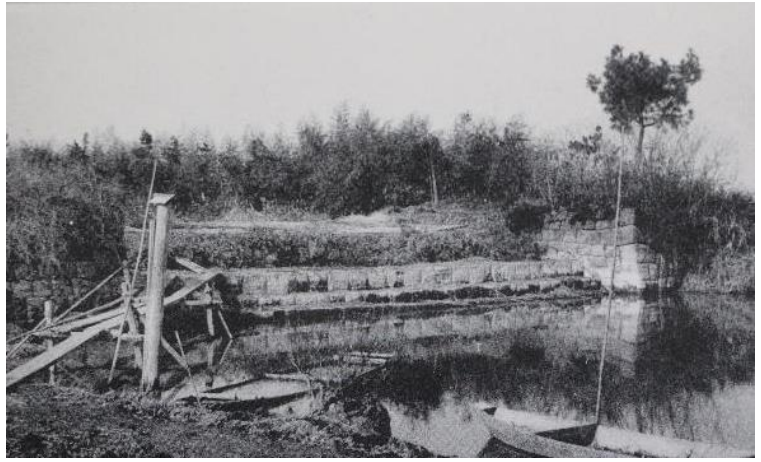
洗い堰(竹流し堰)の材料

(明治10年頃の記録「西方 用水関係書綴」より)

- * 竹……5516本
- * 俵……1548俵
- * 縄……516房

年に数回、洗い堰を作り直したようです。人足(作業員)3666人を動員して行われました。竹は何本かを藤蔓(ふじづる)で束ね、その束をまた藤蔓で縫うようにしてつないだようです。

石堰は大正11年(1922年)12月に撤去され、そこから90mほど下流に鋼鉄製の堰が設けられました。



(埼玉県立図書館所蔵)

川の湊：河岸場

近世から近代にかけて、市域の河川筋にはいくつもの河岸場や舟着場、渡舟場がありました。河岸場は川船が停泊できる施設や運ばれる物産を積み下ろしできる施設と、近くにはそうした仕事に携わる人々のための飲食、休憩の店がある川の湊だったのです。

『彩の川研究会』の調査報告書によると、元荒川筋では竹之花河岸(大道)、締切河岸(南荻島)、大橋際河岸(越ヶ谷本町)、瓦曾根河岸(瓦曾根・東越谷)。綾瀬川筋では越巻河岸(新川町)、よしずや河岸(大間野町)、半七河岸(蒲生)、藤助河岸(蒲生愛宕町)などです。古利根川・中川筋では松伏や吉川、八潮にいくつもの河岸がありました。

四季折々の瓦曾根溜井・河岸場

こうしてみると溜井・河岸場は物流の要だったことがわかります。特に瓦曾根の場合は江戸湾との間に堰がなく、日光道中とも接していて、多くの産品が上り下りしました。それと共に様々な情報も川筋を通ってもたらされました。

江戸時代、90ヵ村組合による溜井と堰の管理は、普段は瓦曾根村の中屋五郎右衛門が差配していましたが、この管理運営を巡って上流の村と下流の村の利害が度々対立して訴訟になりました。また、松土手(中土手)の河岸場は西方村の領分でしたが、後にその上手に瓦曾根村も河岸場を設けたことで争論になりました。後年、この二つは合体したようです。(「越谷市史 一」及び「越谷の歴史物語」第1集より)

今はのどかな風景が広がるこの地にも、このような対立や自然災害等を人々が乗り越えてきた歴史があります。

瓦曾根河岸所属の船 (明治8年「武蔵国郡附誌」より)

- * 百石積の高瀬舟 4艘: 帆のある平底の川船。百石積は約10トンの荷を積めた舟で、長さは10m前後だったと思われます。
- * 八十石積の似船(にたり)船 4艘: 船船(ひらたぶね)に似た船で、長さ10m前後と思われます。
- * 二十石積の伝馬船 1艘: 小型の舟です。

運搬された物産 (原田家文書、「越谷市史」、「元荒川の水運」より)

- | | |
|----|----------------------|
| 上り | 干鰯、灰、下肥、塩、魚油、味噌、藍玉 等 |
| 下り | 米、菜種油、桐、炭、柿、等 |

